
日緋色幻想詩編

池賀弛貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日緋色幻想詩編

【Nコード】

N7213Y

【作者名】

池賀弛貴

【あらすじ】

いつか、どこかの世界。詩を頼りに駆け出した男は、緋色の少女と出逢った。鬼人族の男と緋神の御使いである少女の出逢いは、やがて全ての種族を巻き込み、新たな神話を世界に刻む。故にこれは、二人が紡ぐ幻想物語。作者の妄想が垂れ流された初投稿&処女作です。小難しい言葉や漢字等が多用されると思います。が、作者の趣味ですのでご了承願います。感想とか誤字の指摘とか送って下さったら泣いて喜ぶよ！

序章 はじまりのうた

その日、全ての夢詠ゆめよみの巫女が同じ未来を視た。

同じ詩を詠み、告げた。

世界に変革を齎もたらす者が現れたと。

その詩を頼りに、男は駆け出した。

そして、少女と出逢った。

絶世の美姫すら己を恥じ、如何な名工も再現できぬであろう端麗な顔立ち。

陽光に照らされ、風に遊ばれ、陽炎かげろふの様に緋色にたゆたう長髪。

幼くも妖艶な色香を宿す、宝玉のように透き通った肌。

何よりも、己の全てを覗かれたような錯覚すら覚える、力強く燃える緋色の瞳。

一糸纏わぬ裸身を隠す事もなく、寧ろそれが自然だと感じる程に悠然と、少女は立っている。

その姿を瞳に捉え。

その瞳に捉えられ。

男は理解した。

自分が何故、一心不乱にここを目指したのかを。

詩を聞いた瞬間から高鳴る、この鼓動の意味と理由を。

己は此と出逢う為に生まれたのだ。

己は此の傍らに在る為に生きてきたのだ、と。

夕暮れの光が一際強まり、世界が緋色に染まる。

少女の姿がおぼろげに霞み、燃え尽きるようにその姿が薄くなった。

減りゆく明かりに、満ちゆく暗がり、少女が消えてしまうような気がした。

男の全身が震えた。

嫌だ。此を失うのは嫌だ。

手に入れたわけでもないのに身勝手に、相手の都合など省みずに。

ただ無くさぬよう、縋るように手を伸ばす。

少女を求めて。ただ一途に。

「俺と、添い遂げてくれ！」

深き夢見し宵の夢、微睡まどろみ語る空の詩

父祖の左目を濡らす涙は

未だ天孔てんこうの影に沈まず

赤に芽吹かぬ臍の丘に

芽吹くは一葉あましずくの天霽

緋神の御使いにして大地の巫女

獣の供物にして神威の鞘

数多の異名は霞夢

詠わず詠われず夜を照らす

其は幻想、儚き泡沫

現を見納めし陽鏡の

冷たく愛しき残り香なり

詩と共に、御使いは現れた。

男は、少女と出逢った。

世界の片隅、幻想の果てより、物語は綴られる。

故にこれは、二人の物語。

二人が紡ぐ、幻想詩編。

。

設定一覧（前書き）

固有名詞の説明をしています

設定一覧

【地名／五種族／一族／巫女／神話関連／動植物／登場人物】

地名

【翁頭陸（おうとうりく）……物語の舞台。東、西、南、北、中央を五種族それぞれで統治する。
名前の由来は神話に登場する巨人から。日緋金神話^{ひひがねしんわ}では『父祖の頭』と記されている。】

【大藍湖（だいあいこ）……東方南部にある東方最大の湖。
少数の水人族が生活し、漁業で生計を立てている。】

五種族

【紅童重（クドウエ）……鬼人族の総称。東方を統治する。
中部を治める麗尤^{レイユウ}、南部を治める沙鬼那^{サキナ}、北部を治める貴津香^{キツカ}の『東方三鬼族』と、東部に分散する少数一族からなる。】

【雅鐘儀（ガシヨウギ）……獣人族の総称。西方を統治する。全種族中最も多種多様な分類が存在する種族。身体の一部、または全身が獣のような毛で覆われている者が多い。尾が弱点と言われている。

夜間に活動する者が多いため、西方は永夜の国とも呼ばれる。】

【鈷洞羅（コウロラ）……竜人族の総称。南方を統治する。

強靱な鱗で覆われた一族、翼を持つ一族、火を噴くことができる一族などが存在するが、多種族では判別が難しい。

翁頭陸南端より先に存在する群島の調査を行っている。】

【迦陵蓮（カリヨウレン）……鳥人族の総称。北方を統治する。

美しい歌声と翼を持ち、嘗て奴隷として扱われた時期がある。

現在は北方大森林の奥地に住み、滅多に姿を現さない。】

【吾輪枝（アワエ）……妖人族の総称。中央を統治する。

尖った耳と美しい容貌が特徴。弓術と魔術に秀で、嘗ての大戦で中央を占有した後、翁頭陸の盟主を自称する。】

一族

【麗尤（レイユウ）……中部を治める『東方三鬼族』の一角にして筆頭。『魔道』の麗尤。】

【沙鬼那（サキナ）……南部を治める『東方三鬼族』の一角。『技巧』の沙鬼那。

卓越した戦闘、工芸、狩猟技術を持ち、未修得のあらゆる分野を貪欲に習得する学習意欲を持つ。

現在の当主はヨンイエ。第一子ヤオザンは病没している為、第二子ホウアが当主を補佐している。

末子相続の伝統を守り、現在の次期当主は第四子シンウ（病弱な為、実際にはその夫が代行すると思われる）。】

【貴津香（キツカ）……北部を治める『東方三鬼族』の一角。『勇^{りよく}力』の貴津香。

細身な見た目に反して怪力を誇り、他者の血を吸うことでその力は更に強大になる。

日の光が苦手というわけではないが、夜のほうが活動的である。

男性の出生率が低い為、他族から婿養子をもらったり、逆に嫁に行くことが多い。】

【水人族……大きな水場を生活の拠点とする少数民族。

全身、または半身が魚のような鱗で覆われ、多くの種族が『魚人』と蔑視するが、鬼人族、特に沙鬼那^{サキナ}とは友好関係にある。

漁の名人であり、水中での移動速度は全種族中最も速い。】

【戦巫女……戦場を導く女傑の能力にして役職。

血を流すことで火眼金睛へと変わり、身体能力が上昇する。戦闘指揮にも長ける為、殆どの巫女は自らの一族の軍属となる。

基本的に生理が来ず、故に一代限りで子孫は残せない。発生確率は不明で、現在の翁頭陸には十数名ほどしかないと言われている。】

【夢詠（ゆめよみ）の巫女……未来視を行う異能の存在。

力の弱い者が視る、未来の情報が断片化した夢を見、目覚めて語る事を『夢見^{ゆめみ}』、力の強い者が白昼夢のように未来を視て語る事を『夢詠』と呼ぶ。

力の強い者はある程度自分の意思で未来の内容を選ぶことが出来る（その分精度は落ち、より抽象的な表現しか出来なくなる）。

夢詠を行っている間、その身体が僅かだが発光する。

どういった条件で発生するのは不明だが、力の弱い者も含めれば数百名ほどが存在すると言われている。】

神話関連

【神代（かみよ）……神々の時代。】

【混代（まざりよ）……神々（主に星神）と人の時代。】

【人代（ひとよ）……神々の干渉が少なくなり、人だけで歩んできた時代。】

【日緋金神話（ひひがねしんわ）……原初の渦『有無』^{うむ}からの創世が綴られている、『日緋産靈』^{ひひむすび}と『豊紫芽』^{とよしか}を中心とした起源神話。二柱が太陽神と月神となるところまでは全種族共通であり、その部分までを一般に日緋金神話と呼ぶ。^{ひひがねしんわ}
それ以降の記述が種族によって異なっており、どれが正しい記述なのかで論争が起こっている。が、解決する見込みがない為、別の神話として各種族で語り継いでいる。】

【九鬼王神話（くきおうしんわ）……鬼人族によって語り継がれている、日緋金神話から続く混代を記した神話。】

動植物

【駆獸（チウスオ）……主に乗用や運搬に用いられる卵生の草食生物。見た目はトカゲのような皮膚を持つ馬。硬く長い尾毛を持つ。】

【角打獸（ジアオダ）……大きな角と長い体毛を持つ胎生の草食生物。金槌のような形状の一角を持つのが雌、斧のような平らな形状の二角を持つのが雄。かつてその角は木を打ち倒して新芽や木の実を食べたり、縄張り争いに用いられたと考えられている。非常に硬いその角は約五年で生え変わるの、取れたものは工芸品として重宝されている。長い体毛は毛織物の原料として利用されている。】

登場人物

【インユエ……種族：紅童重^{クドウエ}
紅童重^{クドウエ}の一角、沙鬼^{サキナ}那当主の第三子。銀髪黒瞳。当主の補佐を第二子ホウアが行い、相続権を第四子シンウが持つ為に不自由なく育ってきた。習得したことは満遍なくこなすが、これといって秀でたものはない。】

【リーセ……種族：???
緋色の少女。黒髪黒瞳。何であれ興味を示すが、本当に興味があるのかは不明。】

【メイラン……種族：雅鐘儀^{ガシヨウギ}
戦巫女の少女。金髪碧眼。血が嫌いな戦いの天才。狼のような耳と尻尾を持ち、首周りから背中、腰まで薄い金毛が生えている。】

【シンウ……種族：紅童重^{クドウエ}
夢詠の巫女。青みがかった黒髪、黒瞳。沙鬼^{サキナ}那当主の第四子。身体が弱く、よく体調を崩す。夢詠の力が弱く、具体的に未来の情景を見ることが出来ない。】

第零話 詩に導かれて

太陽が頂から降り始める頃、二騎のチウスオ駆獣が平原を走っていた。

それを駆る二人の騎手は、吹き荒ぶ風に妨害されながらも声を張り上げて言い争っていた。

「インユエ、いくら夢詠ゆめよみがあつたからって、何の備えもなく飛び出すなんて馬鹿でしょ、あんた！」

長い金髪を束ねた女が、舌を噛みそうになりながら叫ぶ。

「そうは言うがなメイラン。シンウが初めて夢詠を成功させたんだぞ？ その内容を確認するまではじっとしてなんていられるか！」

俺は振り返ると、メイランを見て同じように声を出す。

「まあ、チウスオ駆獣を連れて追いかけてきてくれたのは感謝してるよ。自分の足で走っていたら間に合わないところだった」

「あんたの悪い癖よ、周りが見えなくなるの。まったく……それで、私達はどこに向かつてるの？」

「分からないのか？」

驚いてまた顔を向けると、メイランが恥ずかしそうに顔を背けた。

「私は頭の出来が良くないのよ！ この先にはもう大藍湖だいあいこか、南との境しかないでしょ？ どうなのよ？」

「大藍湖が目的地だ。……間に合いそうだな。説明するから速度を落とそう」

始まりは今朝、妹であるシンウを見舞った時だった。

寝台に横になっているはずの妹が窓辺に立っているのを見たとき、俺は思わず驚愕に目を見開いた。

それは、身体が弱く立つこともままならないシンウを心配してのことではなく、彼女の身体が僅かに光を放ち、小さく開いた口から詩が紡がれていたからだ。

『夢詠の巫女』の夢詠

力が弱く、夢見^{ゆめみ}しか行えなかったシンウが今、自身が視ている未来を歌っている。

呆然と見ていることしかできない俺へと、歌い終えたシンウがゆっくりと振り返る。

焦点の合わない瞳で俺を眺め、シンウはまた始めから歌いだした。

深き夢見し宵の夢、微睡^{まじろ}み語る空の詩

父祖の左目を濡らす涙は

未だ天孔^{てんこう}の影に沈まず

赤に芽吹かぬ臍の丘に

芽吹くは一葉^{あましずく}の天雫

緋神の御使いにして大地の巫女

獣の供物にして神威の鞘

数多の異名は霞夢

詠わず詠われず夜を照らす

其は幻想、儚き泡沫

現を見納めし陽鏡の

冷たく愛しき残り香なり

その詩を聞いている間、俺の全身が震えていたのに気付いたのは少し経ってからだ。

なぜこんなに震えるのか。寒いからでも、恐れているからでもない。

むしろ、これは。

喜び、だった。

父から短剣を貰った時よりも、初めて一人で狩りを行った時よりも強く、深く心に響く、期待。

繰り返し歌う声が聞こえたのか、シンウの傍仕えが慌てた様に入ってきた。

俺に気付くと急いで頭を下げる少女に対し、シンウを介抱するように命じる。

少女がシンウに触れると一瞬びくつと震え、シンウは崩れ落ちるようになって倒れた。

慌てて抱き起こすと、シンウは既に目を閉じて深い眠りに落ちていた。

初めて夢詠を行って疲れたのかもしれない。抱え上げ、寝台に横たえると、「お手数をお掛けして、申し訳ありません」と少女が深く頭を下げた。

彼女一人では寝台に寝かせるのも一苦労だったろうし、「構わない」とだけ告げる。

同時に、シンウが夢詠を行ったことを父に知らせるように、と付け加える。

改めてシンウの介抱を任せると、俺は直ぐに館から飛び出した。

詩の内容を思い出す。

もしその内容が今日起こるのであれば、時間はあまりに少なかった。何故こんなにも慌てているのか自分でも理解できなかったが、これは考えても仕方ないだろう。

詩が本当に夢詠であるなら、その内容は必ず起こる。

街を駆け抜ける間に歌われている場所を特定すると、思わず表情が歪む。

休みなく走り続けても、決して間に合わないだろう。

それでも、この胸の高鳴りが足を止めることを許さない。

街の外壁へと辿り着くが、速度は維持したままだ。

街中よりは少ないが、それでも正門は大勢の人で溢れていた。

だが、それに躊躇している暇はない。

その間を縫う様にして進み、ついに門の外へ出た。

俺に気付き呼び止める門番もいたが、俺は一瞥もせずに平原を見据え走り出した。

「はあ。それで慌てて飛び出して、確実に間に合わないであろう自分の足で走り出したと。……あんだ、馬鹿でしょ」

「……………だから、感謝してるって言ってるだろ」

半眼になっているメイランから視線を外し、聞こえる程度の声量で呟く。

「まあいいけど。ただ、館は大騒ぎだったよ？シンウが夢詠をして倒れたとか、インユエが何も言わずに飛び出したとかで。おかげで情眠を貪ってた私まで叩き起こされて、何か知らないかって聞かれたり。寝てたんだから知らないに決まってるでしょうに」

メイランの愚痴が続く。

「それで話を聞いて、恐らく夢詠の内容を確認しに行ったというのは推測できたけど、じゃあ何処へ？　って疑問が残るし。仮にも沙鬼^{キナ}那当主の子が所在不明はまずいだろうって、唯一暇してた私に探しに行けて命が下るし。門に駆け付けて事情を話してみれば、門番が「インユエ様を見たのに止めることが出来なかった」って泣きそうになるし。泣きたいのはこっちだって。一応どっちの方角に行ったのかは見てみたいだから、門番の詰め所に繋がれてた駆獣^{チウスオ}を二頭後払いで買い取って出てみれば、どっかの馬鹿が阿呆面で走ってるし。あ、支払いはあるがしてね。私払う気ないから。……そんなわけで、なんか私凄く疲れたんだけど。ねえ、なんで？　これ私の仕事だっけ？　戦巫女って使い走りって意味だっけ？」

「……………だから、悪かったって。それで、詩の内容だけだな」

放って置くといつまでも愚痴っていそうだったので、適当に話を区切る。

「そうそう、それも聞きたいんだった。内容は分かったけど、なんで大藍湖なわけ？」

「緋神ひがねしんわってのは日緋金神話の太陽神、日緋産靈ひひむすびのことだろう。日緋金神話がねしんわの記述は全種族の神話で共通だし、この辺りで有名な九鬼王神話くきおうしんわももちろんそうだ」

説明を始めると、「うつ」とメイランが呻く。

「理解、出来そうか？」

「……頑張る」

「……九鬼王神話くきおうしんわで父祖と呼ばれる存在は、誕生の瞬間に熱で焼け死んだ太陽神である日緋産靈ひひむすびと月神である豊紫芽とよしがの子だ。崩れ落ちたその身体を寄せ集めたのがこの世界の大地。だから鬼人族『紅童クドウ』は、全ての命が育つ為の苗床となった存在を父祖と呼び尊んだ。そして神話によれば、五族が治めるこの地『翁頭陸おうとうりく』、特に俺達が暮らすこの東方が父祖の左顔に当たる」

「……………」

「メイラン？」

「知ってたし！ そのくらいずっと昔から知ってたし！」

「なんで強がつてるんだおまえは……」

意味もなく張り合うのは止めて欲しい。

「……ああ、この地は東側で顔の左に位置するから、『左目を濡らす涙』で水場。だから大藍湖なのね」

「そうだ。ここよりも大きな水源はないし、他も小さなものばかりだ。『天孔』は光の世界である天に開いた穴、つまり月のことだろう。よってその『影』は月光。今の時期、月が昇るのは日が落ちてからだから、時刻は夕刻、日暮れ頃だと予想できる」

「……なる、ほど。だからこんなに急いでたのね」

なんとか合点がいったらしく、メイランが頷く。

「足が速い駆獣チウスオを用意してくれたおかげで間に合いそうだけだな。感謝してるよ。それで、『丘』というのは湖の東側にある場所のことだろう。湖の東北には丘がいくつもあるが、特に東の辺りは獣もないし、魚も少ないらしいから人気もない。そこに『芽吹く一葉』、何者かが現れるということだ」

そこまで説明して、メイランの表情が強張っていることに気付く。

「どうした？」

「『緋神の御使い』……それで『巫女』だから、太陽神の娘でも降臨するのかもね」

「否定はできんな。『見納めし』ってのも気になる。もしかしたら視使いは、この世界から神々の加護がなくなってしまう事を告げに来るのかもな」

やれやれ、と首を振り、メイランがぼやく。

「シンウもどうせなら、もっと良い未来を視ればよかったのに。豊作とか、大猫とか」

「初めて夢詠をしたんだ。それが神に関わることならむしろ誉れだろう」

「内容が破滅的だったら意味ないでしょうが」

俺の模範的とも言える返答に思わず顔を顰め、メイランが前方を見据える。

「やだねえ、特に面倒事はごめんだわ。だらだらと寝て過ごしたい」

「戦巫女が言っている台詞じゃないだろう、それは」

「戦巫女だからこそ、平穏を何よりも尊ぶのよ」

妙に達観したような声で応えるメイランに、そういうものと納得する。

「もうすぐ大藍湖が見えるね。何も起こらないことが理想だけど…
…一応武装しておいたほうがいいのかもね」

「持ってきてるのか？」

「とりあえず、ね。インユエの剣も持ってきてるよ」

用意のいいことだと思いが、勝手に人の部屋を漁るのはやめてほしい。

夕暮れの一步手前といった空模様の下で、ようやく大藍湖の全容が視界に入るようになった。

湖の北東側は大小の丘が連なっており、その北端に辿り着いたのだ。

大藍湖は東方随一の大きさを誇る湖であり、その西端には少数の水人族が暮らしている。

彼らは他の種族とほぼ同じ形をしているが、近付いて見るとその全身は細かな鱗で覆われており、足が長く指の間に水掻きが付いている。

水中でも地上でも生きられるらしく、その生態を調べる為に妖人族の学者が大挙して押し寄せたこともかつてあった。

まあ、その時は全員が水中へ逃げ、無駄足となっただけらしいが。

長い付き合いである鬼人族の一角である沙鬼那サキナの民は、彼らを自称でもある水人族と呼んでいるが、どうやら他の地方では彼らを『魚人族』と呼ぶらしく、それが彼らには気に食わないらしい。

曰く、「魚なんぞと同一視されるのは不快だ」とのこと。

沙鬼那にとっては貴重な交易相手であるため、多種族との接触が少ない現状はある意味喜ばしいことだという。

彼らにとってそれが良いか悪いかは別として。

視界の先に水人族の村の明かりが僅かに見えたのを確認しつつ、湖の東の丘を目指す。

「インユエ、チウスオ 駆獣から降りて。人がいる」

言葉と同時にメイランは素早くチウスオ 駆獣から降り、繋げておける木を探すように視線を巡らせた。

「詩の巫女か？」

同じように降りてちょうどいい大きさの木を探す。

右前方にあった木に目星を付けたのか、メイランが手綱を取りながら進む。

「いえ、複数いる。それにこの匂いは、南の竜人族みたい」

「竜人族？ コウロラ 鉦洞羅が境を越えて来たつてのか？」

チウスオ 駆獣を木に繋げて振り返ると、メイランははつきりと頷いた。

現在、東、西、南、北、中央のそれぞれは大まかに各一種の種族が支配している。

東の鬼人族、総称『紅童重（クドウエ）』。

西の獣人族、総称『雅鐘儀（ガシヨウギ）』。

南の竜人族、総称『鈷洞羅（コウロラ）』。

北の鳥人族、総称『迦陵蓮（カリヨウレン）』。

中央の妖人族、総称『吾輪枝（アワエ）』。

東西南北は各々が相互不可侵を約束しており、基本的に関わり合わず、他種族の土地へ行くこともない。

これは争いを未然に防ぐ為の物であり、中央の妖人族が種族間の調停者として中立の立場を取っている。

過去の争いから互いを憎悪し合っている歴史の中で、唯一どの種族とも争わなかったのが妖人族だからだ。

よって互いに行き来をしようとしなないわけだが、多くの土地を回る必要がある商人や冒険者であればその枷から外れる。

が、それでも中央で認可を受ける必要があるし、そもそも竜人族の商人・冒険者がこんな場所へ立ち寄ることなどないだろう。

竜人族は水人族を蔑視しているし、それ以上に鬼人族を嫌悪しているのだから。

「境を越えたと言っても柵があるわけでもないし、大藍湖は東側にあるといっても、西から見ても近場だからね。竜人族がいること自体は、不自然だしおかしいわけだけれど、有り得ないことではないでしょう。明らかに武装している感じだから冒険者かもしれないし、ただ、ね。」

おかしいのは複数いる竜人族全てがさっきから移動してなくて、どうやら皆倒れているみたいなのよ」

「なんだって？」

何故、倒れたまま動かないのか。

何故、領域を侵してまで竜人族がいるのか。

冒険者だったとしても、この地に竜人族がいることはおかしい。

それなのに、複数の竜人族が現に今、この場所にいるという。

その理由は何か。

考えられるとしたら、それは 。

「彼らも、夢詠の詩を聞いたのかもね」

「……かもしれない。けど、有り得るのか？ 異なる巫女が同じ詩を歌うなんてことが」

「インユエに聞いたただだから何とも言えないけど、見た感じではシンウは自分の意思で夢詠を行ったわけではないんでしょう？どちらかというところ『詩が降りて』きて、それを歌っているようだったって」

「ああ、俺にはそう見えた」

「若しかしたらこの地方、いいえ、全ての巫女に同じ詩が降りてきたんじゃないかしら。ここ数十年はなかった筈だけど、昔話なんかでは、そういうこともあったって聞いたことある。……そういった時の内容はほとんどが天変地異テウスオたしいけど。」

少しの間なら竜人族は駆獣テウスオよりも早く移動できると聞いているし、翼を持つてる者もいるから飛んで来ること出来る。同時刻に聞いて直ぐに出發したのだとしたら、彼らが先に到着していてもおかしくはないと思う」

そう予測するメイランの言葉に鳥肌が立った。

もしそうだとするならば、竜人族達は先に到着して詩にある巫女を待っていたことになる。

そして今、彼らは倒れていて動かない。

現れた何者かが、彼らに危害を加えた可能性がある？

「つまり、現れた巫女と戦うこともあるかもしれない、ということか」

「まあ、そもそも現れたかどうかはまだ分からないけど。今は竜人族以外ないみたいだ、し」

恋焦がれるように胸を締め付けるこの感情の源と争わなければならないのかと思うと、呼吸が苦しくなる。

でも、それでも行かなければならないだろう。

竜人族達の状態を確認しなければならなし、詩の時刻は目の前にまで迫っているのだから。

「待つて。 インユエ、待つて！」

「っ！？」

袖を強く掴まれ、慌てて意識を戻す。

目を見開き、唇を震わせるメイランの様子に、鼓動が早くなる。

「ど、どうした？」

「……………いる」

信じられない、とでも言うように身体を震わせる。

「いる……………って、何がだ？」

「分からない。分からないのよ！ 鼻も耳も何も感じない。でも、今、確かに感じた。いや、感じて^いいる。竜人族でも鬼人族でも、今まで会ったことのある全ての種族とも違う、^い何かが、この先にいる！」

「……なんだって？」

一瞬、理解できなかった。

匂いも音もなく、けれど確かに存在する何か？

つまり、そういう常識の埒外にある者が現れたということ。

「ど、どうする？ ここは、一番近い集落にでも行って戦える人を集めた方が……」

「いや、このまま進む」

「インユエ?!」

はつきりと自分の意思を示すと、メイランが驚きに声を荒げる。

「自分が何を言ってるのか分かってるの？ 何かがいる。傍には動かない竜人族達。つまり、その何かにやられたってことでしょ？」

「まだはつきり確定したわけじゃないだろう。それに、彼らが詩を聞いてここまで来たんだとして、あそこ^いにいた何かを捕らえようとした結果反撃されたのかもしれない。ここでこの場を離れて、結果

そこにいた何かが姿をくrams方が面倒だ。危険な存在ならそれこそ放っておけないし、その何かが人型であれば意思の疎通くらいできるだろう。

それに、もう詩の刻限だ。その何かが詩の巫女とは違うんだったら、これからここに現れるかもしれないだろ？ その何かが危険な存在だったら、巫女を保護しないといけなくなる。危険の在る無しに係なく、状況だけは確認しないと。まあ、何も言わないってことは血の臭いだってないんだろう？」

「それは、そう、だけど……」

それでも不安そうなメイランに、諭すように笑いかける。

「まずは、目で確認してみよう。どういった状況で、何が起こっているのか。どうするかはそれから考えればいい。危険なら逃げる。保護が必要な相手がいれば保護。それでいいだろ？」

「……………うん」

まったく。普段はこんなに臆病なのに、これが戦場となると百戦百勝の戦巫女へと変貌するんだから笑えてくる。

「……………なに？」

「いや、なんでもない」

ここからは音を立てず、周囲を警戒しながら進んだほうがいいだろう。

本当は、駆け出してしまいたい。

脈が速くなり、鼓動が痛いほど耳に響いている。

駆け足になりそんな心を抑え、慎重に一步步歩き出す。

この期待は、なんなのだろうか。

その答えが、この先にある。

そして、俺は見た。

緋色の少女と、出逢った。

心に広がる奇妙な温もりと、既視感。

足元に横たわる竜人族の呻き声、背後に立つメイランの呼び声すらどこか遠く。

俺は、少女に求婚した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7213y/>

日緋色幻想詩編

2011年11月21日16時31分発行